

氏名	孫于景 (ソンウギョン)
学位の種類	博士(造形)
学位記番号	博第11号
学位授与日	平成24年3月31日
学位授与の要件	学位規則第3条第1項第3号該当
論文題目	映像における「パトス」の手法 —自作を中心に—
審査委員	主査 武蔵野美術大学教授 板屋 緑 副査 武蔵野美術大学教授 朴 亨國 副査 武蔵野美術大学教授 高橋 陽一 副査 武蔵野美術大学教授 篠原 規行 副査 早稲田大学教授 藪野 健

内容の要旨および審査結果の要旨

審査委員会は孫于景^{ソンウギョン}(造形研究科博士後期課程造形芸術専攻環境形成研究領域在学)から提出された博士論文『映像における「パトス」の手法 —自作を中心に—』について審査をおこない、博士(造形)の学位を授与するにふさわしいものとの結論に至った。

審査にあたっては、本論文を検討し、2012年2月20日に公聴会を実施し、次いで、審査委員会が本人に口述試問を行い、作品制作と論文の関係においても優れた内容をもっていることが確認され、博士(造形)の学位にふさわしいと結論した。

1. 博士論文(学位請求論文)の概要

本論文は2011年6月に審査した予備論文を加筆訂正して提出されたものである。予備論文の段階で指摘された言語表現上の問題や論理構成などについては大きな改善が認められた。特に本論文の段階で加筆された第三章の第四節—映像における「パトス」の達成—は、本論文の核心となり、予備論文の段階では先行するエイゼンシュテインの「パトス」という手法論の優位性を評価するあまり、自身の制作の手法の意義や独自性の主張が見えにくいとの指摘を見事に改善した。また、予備論文以後、作品においても自身の手法の理論的根拠を明示するために習作「交差点、木曜日の朝」を追加制作している。

本論文の構成は以下のとおりである。

序論

第1章 手法を顕在化させた三つの方法論

第1節 異化の手法

- 第2節 形態操作
- 第3節 エイゼンシュテインの「パトス」
- 第2章 異化、形態操作、「パトス」の類似と相違
 - 第1節 類似
 - 第2節 相違
 - 第3節 映像における「パトス」、映像の独自性、「パトス」論の評価
- 第3章 「パトス」の手法に基づいた映像作品分析
 - 第1節 エイゼンシュテインの映画における「パトス」
 - 第2節 自作の「パトス」的手法
 - 第3節 エイゼンシュテインの作品と自作の類似と相違
 - 第4節 映像における「パトス」の達成
- 終論

序論においては、自身の映像作品が手法だけで自立することの可能性を発見し、それを論証することを本論文の目的として示している。ここで、本論文で頻繁に使われている、操作、手法、形式という3つの用語を連続的に規定していることは重要である。

第一章では、先行する手法論として、詩、言語の領域からロシア・フォルマリズムの異化の手法、絵画、建築の領域からマネリスムの形態操作、映画領域からエイゼンシュテインの「パトス」の概要を説明し、更に各々の手法論に自作を引き寄せて考察している。

第二章では、3つの領域の3つの手法を時代背景や用語の違いを越えて、先に連続的に規定した操作、手法、形式という語によって、同じテーブルに載せて、それらの類似と相違を明らかにする。そしてそれらの分析結果から、自作の手法がエイゼンシュテインの「パトス」に接近していることを発見する。

第三章は、エイゼンシュテインの「パトス」におけるピラネージのエッチング作品の分析方法でエイゼンシュテインの映画のシーンの分析を試み、同様の方法で予備論文提出以前に制作した自作を分析する。その際、氷のフィルターが溶けていく過程において、画像の中の要素の輪郭線の変形を図示し、その変形を夥しい操作の変化、移行による結果として捉えていることは重要である。

時間の経過とともに、操作が刻々と変化することによって、自動的に手法も変化し、そこに立ち現れる形式も刻々と流動していくことを発見する。この形式の流動性を際立たせる自作として「交差点、木曜日の朝」を制作し、その手法の分析、評価する。

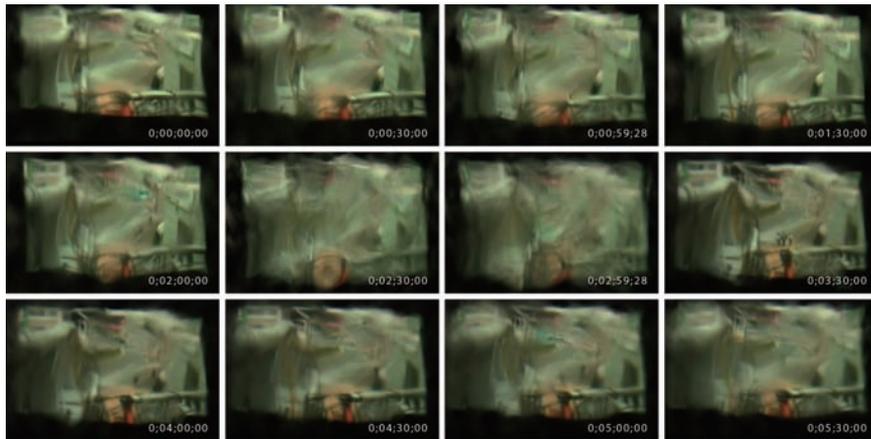
終論においては、自作における手法の理論的根拠を各章に沿って明示し、更に自作を越えて、映像という形式の正体を形式そのものの流動性にあることを明らかにする。

2. 本論文の評価について

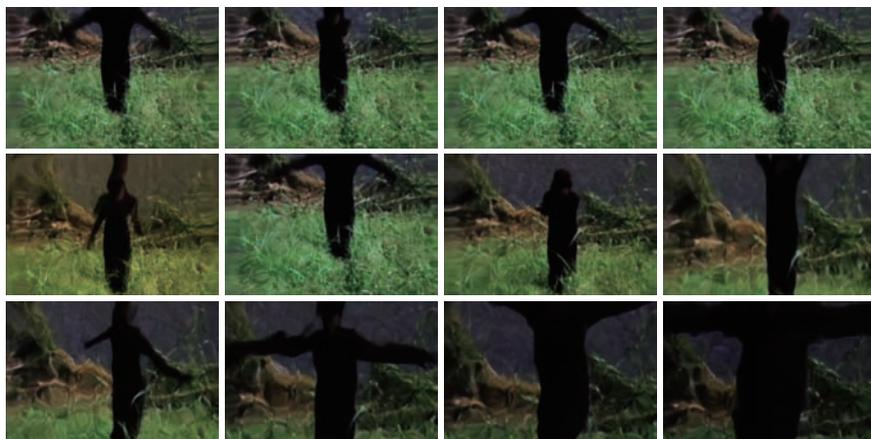
●本論文は手法研究であり、自作の手法を中心に、その理論的根拠を探求することは、制

作と研究が直接的な関係を持ち、博士論文を作品と論文のかたちとする場合の美術大学ならではのあり方として評価できる。

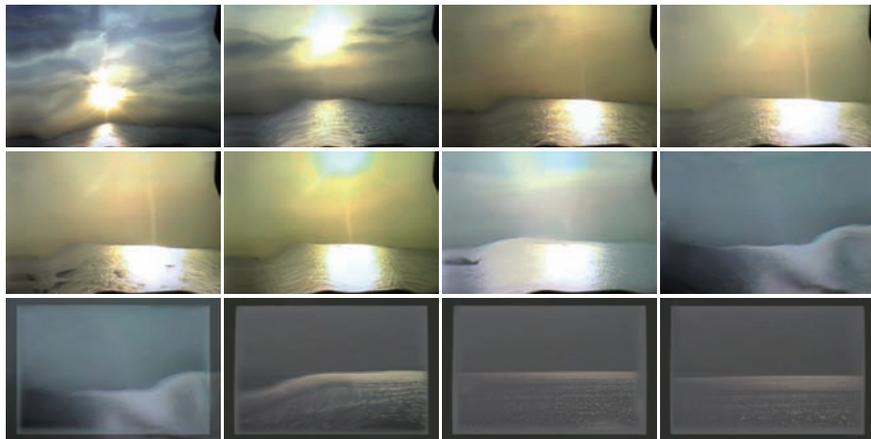
- 本論文は、自作の手法の理論的根拠を明らかにすることに端を発しているが、自作の手法における形式の流動性の発見により、映像の領域の独自性が、形式そのものの流動性にあることの結論に至り、映像全体に展開される定義を新たに加えたことには意義がある。
- 映像作品、特に予備論文以後に制作した習作「交差点、木曜日の朝」において、カット編集なしに2つの時間性を併せ持たせたことは、映像にもう一つの次元を与える試みとして独自性がある。



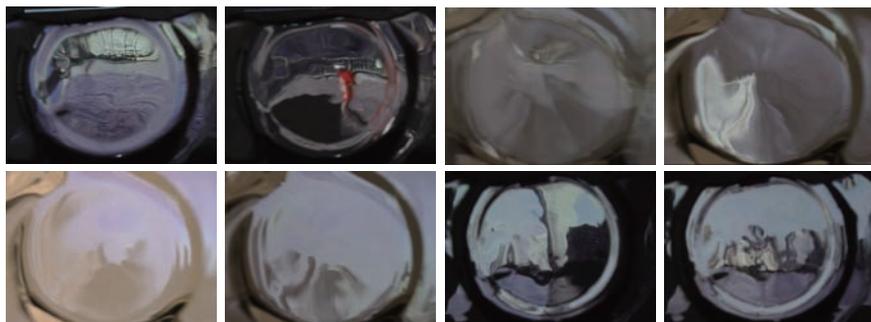
① 交差点、木曜日の朝 6分00秒



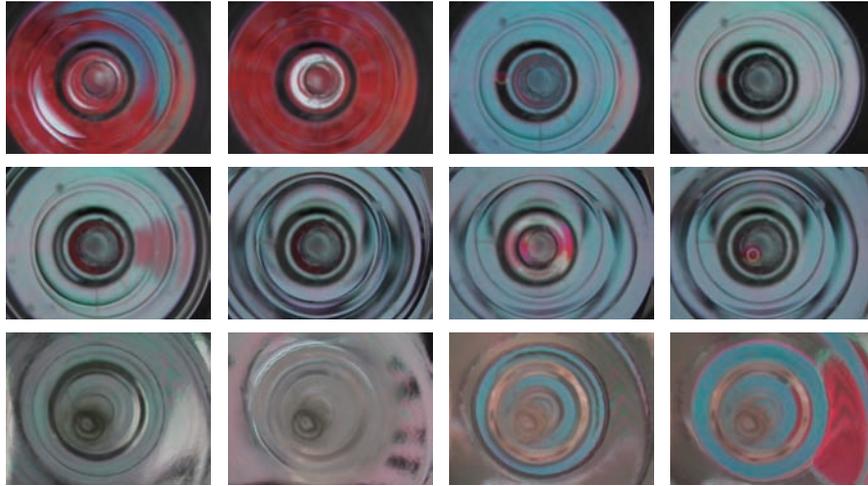
② 自画像「鳥」 15分07秒



③ 循環 32分26秒



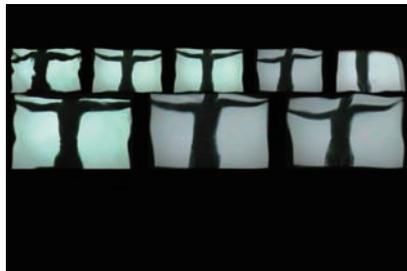
④ 回帰 34分10秒



⑤ 呼吸 10分09秒



⑥ 自画像「鳥」9面 3分00秒



⑦ 軸8面 3分25秒



⑧ 滝9面 2分19秒

